田中希生
Kio Tanaka (Nara Women's University)

事故から出来事へ
——新しい進化論の形——

高木由臣著
『有性生殖論——「性」と「死」はなぜ生まれたのか——』
（NHK ブックス、2014 年）

序

科学は機能の発見／発明に、人文学は概念の発見／発明にかかわる。だから、前者は「いかに」と問いかけ、後者は「とはなにか」と問いかける。

フランスの歴史家ジュール・ミシュレは、中世末期のヨーロッパを「再生（ルネサンス）」と呼んだ。この概念は、もちろんそれ以前から別の形で用いられたことがあったにせよ（たとえばヴォルテールによって）、ミシュレによってはじめて、ヨーロッパのある時期の歴史的思潮を意味する語として変質した。中世のひとびとが、自分たちの生み出す文芸の総体を「ルネサンス」という語で呼んでいたわけではない。一見すれば、19 世紀という革命の世紀から中世末期の文芸に与えられた「評価」あるいは「認識」であって、対象の帯びている歴史的言説から直接引き出すことはできない。にもかかわらず、この概念の変質を、ひとは歴史的なものとして受け容れている。「ルネサンス」は、たんなる認識や解釈であることを超えた、当時の文芸に胚胎していた純然たる可能性（本質といってもいい）であって、この可能性をミシュレが現実世界に引きずり出したのである。これが、人文学者のする、概念の発見／発明である。

では科学の場合はどうか。たとえば「進化（エヴォリューション）」について。もちろんこの語も、もとの意味は人文学の対象となりうるような、「回りながら外へ広がる」という意味の動詞の名詞形であり、たとえその対象が生物学におけるある種の変化に用いられたにせよ、人文学的には、ある事象それ自体がもっている、19 世紀という革命の世紀にいたひとびとの見出した「概念」である。だが、科学の標的は、概念であるよりも機能である。それは、対象と環境（ときに科学者をも含めた）とのあいだで繰り広げられる関数＝機能であって、いくつかの変数や定数との連係のなかで、種はふたたび活動状態となり、われわれの種についての思考に、「進化」という新しい認識の仕方をもたらしたのである。

その意味で、両者は、人間の思考のいくつかのタイプのうちの主要なもののひとつである。しかしおそらく、ひとの思考が純粋な科学であったり、純粋な人文学であったりすることはほとんどできない。交錯があり、分化があり、合成がある、それがひとの思考の描く、毛糸玉にも似た（あるいは幼稚園児が描く錯綜したクレヨンの線に似た）曲線だろうと思われる。機能から概念へ、概念から機能への移行は、たとえば現象と物自体とを区別する新カント主義哲学が想定しているほど、厄介なものでも禁止されているものでもない。かつて、現象（事実）と物自体（虚構）とに世界を分割するこの哲学にもとづいて、学問が人文科学と自然科学とに分割されたことがあった――今でもそうだ――が、もし、革命的な思考というものがありうるとすれば、それはやはり、そうした区別を横断することにある。

もしかしたら、科学は「事実」をあつかい、人文学は「虚構」をあつかう、という素朴な思いなしもあるかもしれない。だが、「事実」についてのこだわりは、科学者に劣らず人文学者ももっているものだし、人文学者だけが、非現実的な知を扱っているわけではないこともあきらかである。「事実」から受け取ったさまざまな断片から、われわれは機能であったり概念であったりを思考しているのであって、だから、事実と空想のような形で学問を分類するやり方は、人間の思考の実態にあっていないばかりか、思考を阻害しているとさえいえる。

ミシェル・フーコーによれば、17 世紀には生物学は存在せず、概念を集めて並べる自然史だけがあったという。それが生物学の形をとるようになるのは、自然史が、

ある種の歴史性＝機能を導入することによってである。それこそ、「進化」である。ジョルジュ・キュヴィエやジョフロワ・サンティレールは進化論に反対していたが、生命を一覧表のなかに収めようとする試みが限界に直面し、それ以上先に進もうとすると、そこに、なんらかの歴史性＝機能を導入せざるをえなくなったのである。つまり、生命を存在ではなく機能としてあつかう科学が誕生したのだ。

その点から考えると、生物学が誕生したときのような、概念と機能を横切る思考の冒険は、もう生じないと言い切るのは得策ではない。種と自然環境のあいだの関数としての「進化」を超えて、「進化」の概念それ自体の存在理由を発見しようとするとき、あるいは古いヨーロッパの文芸から抽出された「再生」という本質が、ひとびとと現実社会のあいだの関数として新しい認識をもたらすとき、思考それ自体が事件となって、われわれの前に出現するだろう。思えば、「進化」は、機能であるよりも人間存在の本質的概念――すなわち悪名高い社会進化論――として、いかに19世紀の革命を勇気づけてきたか……。

一、新しい進化論

高木由臣の『有性生殖論』（NHKブックス、2004年）は、科学における性、死、そして進化をめぐる書物である。それらはすべて、対象と環境とが織りなす関数＝機能でありうるが、著者の思考をたえず勇気づけているのは、それらの関数が、概念として現実に存在することの意味である。著者はいう。「あらゆる生物には存在理由がある。あらゆる現象には存在すべき意味がある。しかし現実には、特別な理由がなくても生物は存在しうるのかもしれないし、特別な意味をもたない現象もあるのかもしれない。しかし、特別な理由や意味を考えることによってしかわれわれの理解は進まない」(p.38)。そして、「有性生殖」という語の（社会的な）意味から、自身の考察を開始する。こうした態度に、われわれは、生命現象の本質にある渾沌から概念を引き出そうとする、人文学者的な意志を感じることができる。

「生殖」とはなにか――？ 「生殖」の語の前者、すなわち“生まれる”とは新個体を形成することであり、後者の“殖える”とは文字通り増えることを意味する。だが、無性のそれは前－個体的であるし、有性のそれは自己同一的なものの増殖とはいえない。生殖という誰にでも理解できるはずの言葉が、性を介在させた瞬間に、引き裂かれてしまう。無性から有性への進化がもたらしたのは、生殖の概念の決定的な矛盾である。科学者である著者は、この矛盾を弁証法的に解決したりはしない。まさに科学者として、生殖という従来からある関数に、無性から有性への進化という独自の変数を加え、その様相を一変させることで応える。それが、年来のゾウリムシの研究から得た、突然変異の抑制＝遺伝子の非－多様化＝進化という奇妙な視座である。不思議なことだが、進化にとって唯一の機会であるはずの突然変異はむしろ抑制されるべきなのであり、自己抑制とは、どうやら生産のようなのである。

著者にこうしたストア的な進化論をもたらした直接のきっかけは、ゾウリムシのおこなうオートガミーである。「原始的な有性生殖」であるそれは、異性も関与せず、接合も起こらず、そして遺伝的多様性も生まない、同じひとつの細胞内で起こる、減数分裂と受精のプロセスである。体細胞系列（ソーマ）である大核はこのプロセスのなかで死に、生殖細胞系列（ジャーム）である小核が生き残って別のソーマを生み出す。すなわち有性生殖に特有の世代交代が発生する。ソクラテスがピュタゴラス派の賢者から聞いた言葉のなかに、「生とは死であり、肉体（ソーマ）とはひとつの墓（セーマ）にほかならない」という有名な一節が出てくるが、有性生殖は、この言葉どおり、死を生み出したのである。著者の卓見は、ゾウリムシの寿命論争をめぐるT･M･ソネボーンの重要な発見、「ゾウリムシはオートガミーを行うゆえに寿命をもつ」を次のように拡張したことである。「有性生殖をする生物は寿命をもつ」(p.89)。ひとの死 - 生は、性によって起動する。

17世紀フランスの解剖学者グザヴィエ・ビシャは、それまで正反対のものと考えられていた生と死について、独自の哲学を表明している。「死に対して生が浸透性を持っている…。ある病的状態がつづく場合、「死化」によって最初におかされる組織は、いつも、栄養が最も活発なところ（諸粘膜）である」(『病理解剖学』1825)。すなわち、人間は生きているときからすでに死に始めている。生と死は、対立するそれぞれ独

立した概念ではなく、ひとつの関数、死は生のもつ機能として表現されるのである。死は時間軸上のひとつの点でさえない。「死は多様なものであり、時間の中に分散しているものである。それを起点として、時間が停止し、逆転するというような、かの絶対的、特権的時点ではない。死は病そのものと同じように、多くのものが集まっている存在であって、分析によって、時間と空間の中に配分されうるものなのである。少しずつ、あちこちで、結び目の一つ一つが切れ始める。少なくとも主な形においては、生体の生命が停止する。というのは、個人の死のずっと後まで、生命の小さな島が諸所に頑張っているのを、今度は、極く小さい、部分的な、いくつかの死がおそって、解体させることになるからである」(*Recherches physiologiques sur la vie et la mort*, 1800)。

だが、著者の認識は、ビシャの革命的認識を更新するように思われる。性成熟のはじまるゆるやかな傾斜にこそ、死／寿命の最初の徴候を読み取るべきだからである。アナロジーとしていえば、社会的には、いまだ個体化（人文学的にいえば主体化）を遂げる途上の《子供》は、寿命のプロセスから相対的に免れている可能性がある（今日の人間の寿命の見かけ上の延長は、すくなくとも社会的には幼年期の長大化にみえる）。生の始まりもまた、多様なもの、時間の中に分散しているものかもしれない。

ともあれ、生はひとつの抑制として提示された。性でさえそうである。われわれは、欲望（私欲）についての、もっとちがった定義を必要としているのかもしれない。欲望は、外部から抑制されたり解放されたりするというより、それ自体が自己抑制的性質をもっている可能性がある（たとえばマゾヒズムとはなにか？）。われわれの個体化（主体化）は、生殖細胞における、あるいは性成熟にともなう細胞分裂の停止や、さらには死そのものによって引き起こされる。バクテリアのような、前－個体的で無限に増殖をつづける（無性生殖をおこなう）寿命をもたない原核生物は、その正反対の場所にいる。抑制とは生産であるといったが、進化もまた、抑制なのである（著者はその流れを「暴走系から抑制系へ」p.161 と呼ぶ）。

人文学者であるわたしには、著者のこの視座が、これまでの進化論を決定的に変更しているようにみえる。著者はいう。

C・R・ダーウィンの『種の起原』出版一〇〇年記念の一九五九年、私は徳島城南高校の二年生であった。…進化論とは「生存競争に勝ち残る原理」だというのが私の理解であった。以後「進化」への関心を高め続けたのは、生存競争に勝ち残れそうにない自分はどうすべきかと考え続けたせいかもしれない。そういう中で、C・R・ダーウィンの“Survival of the fittest”（適者生存）の原理から、木村資生さんの中立説による“Survival of the luckiest”（幸運者生存）の原理へのパラダイムシフトは、科学理論以上に救いの哲学になった。

出版一五〇年記念の二〇〇九年には大学を退職していて、進化とは「自らの中に隠されている能力をどう生かすかの問題」だと理解するようになっていた。（p.209）

最後の理解は、前成説から今日の遺伝学にいたる、それまでの進化論とはまったくちがうようにみえる。最後のそれは、いささか価値論的な、あるいは生気論的な響きをもちすぎてはいないか？　そうしたダーウィニストの疑問はもっともだが、適者か幸運者かを問う前者二つが疑っていない、「生存」という 19 世紀的な言葉にも、じつは負けず劣らず、特有の価値観が込められているのである。すなわち、死を免れて永続的な生存を最優先する、「個体」を前提した価値観である。だが、ビシャや高木によるなら、個体の生は、死のひとつの機能であるにすぎない。

前者二つ（いわゆる選択説と中立説）は、どちらもおのれの外的要因（自然環境なのか、運命なのか）に自分の生を託している点では、じつはそれほど差はない。むしろ今日の理解のとおり、両立すると考えるのが正しい。生命は、適者を競う者たちおよび自然環境の剥き出しの「力」の飛び交う世界か、それとも神のもとでの「無力」以外の生き方をもたない。すべては、究極的には事故 accident である。偶然ある環境で「力」を得た種族も、別の環境ではそういえず、けっきょく運命がすべての決定因であるなら、進化の概念自身に疑問符がついても仕方がない。というのは、無数の突然変異をある同じ一線上に収める劣位から優位への流れ――といって誤解があるなら系統の流れがもつ意義を想定できないからである。だが、最後のひとつは、依然として偶然が作用する世界であるとはいえ、運命そのものを選びとることの可

能な、出来事 incident へと、決定的にその場所を移しているようにみえる。すなわち、生命は、「力」というより「能力」をもつ。

仮に著者のいうとおり、進化＝隠された力の出し入れが起こるとしても、古い動物精気のようなものを進化の要因として認めるのはもちろん得策ではない。選択説や中立説が明確に論駁されているわけでもない。突然変異は、依然として重要な要素であるし、表現型を決定しているのは、あいかわらず自然選択や運であろう。しかしだからといって、すべてがたんに環境や幸運に託されているともいえない。諸々の突然変異の結果である個体でもなければ、ある突然変異を固定した種でもないものを考える可能性は残されている。別の言い方をすれば、唯名論的でも実在論的でも、ましてや“記号（シニフィアン）”的でもないものを考える余地はある。すなわち、突然変異の抑制としての、種の個体化である。

著者はいう。

> 原核細胞は、細胞分裂を止めるための特別な仕掛けをもたないので、事故以外に自分で死ぬことができない。言うなればブレーキのない車のようなもので、餌のある限り分裂し続ける。（p.161）

有性生殖を知らない原核細胞は、事故以外に死ぬ方法をもたない。事故は外的な環境変化がもたらすだけではない。細胞分裂の途上で、遺伝子の突然変異による死がもたらすものも、同じくランダムという点で事故死である。それが事故である点について、有害な環境変化とかわりはない。つまり彼らは、外からだけでなく、内からも事故の可能性に晒されている（晒すという用語はおかしいが）。そんなあらゆる偶然死の可能性のなかで、唯一彼らが取り除けるものがある。それが遺伝子の突然変異である。すなわち、細胞分裂を中途でやめてしまい（二倍体となり）、突然変異という事故死（即死）の可能性を開示せず溜め込んで、緩慢な死に変えてしまうことである（それは遺伝子自身が可能にするのだろうか？　それとももっと別のなにかが？）。

生命が外部と内部という、剥き出しの世界とは異なる世界のあり方に気づいたと

き、次のものが一挙に出現したと考えられる。一、内部に生じた外部（突然変異した遺伝子）、自己と内なる他者との相克＝「個体（主体）化」。一、そのつど繰り返される時間ではなく蓄積され緩慢に消え去る時間、すなわち「進化／歴史」。一、偶然のなかから必然を生み出し、生命を可能にする自己自身の力の新たな形態、すなわち「能力」。遺伝子のうえで進化が起こるのではなく、遺伝子の変化を自己抑制することが進化を生み出す。進化は、仮にそうみえたとしても、外的環境に完全に依存しているわけではない。進化とは、力の獲得というより、力の抑制であり、抑制こそ、他者と自己とを同時に可能にする。生命の外的な多様化は環境や運命に対する結果であって、重要なプロセスは抑制＝潜勢的自己多様化にある。換言すれば、突然変異は、決定的なきっかけになるよりもむしろ、ポテンシャルを形成する。

自己にとって有益でも有害でもない、また中立でもそうでもない、蓄積可能なあらゆる突然変異の束は、環境や運命のような外的決定要因に対する屈折や分化を可能にする柔軟性を生む（あえて“構造”とは呼ばないでおこう）。こうした柔軟性――ポテンシャルのそのときどきの発現を、「文化」もしくは「時代」と呼んでもいいかもしれない。逆に、あるひとつの環境、あるひとつの運命への過剰適応（過進化）は、個体発生から柔軟性を奪って屈折や分化を不可能にし、かえって系統の流れを途絶させかねない。つまり、自然の選択がいかに強力であろうと、適者や幸運者がかならず生き残るというわけではないのだ。ただし、その一方で、環境や運命の変化にかかわらず、個体の死によって応えることも、絶滅しないかぎり、生命のする柔軟な選択のひとつになる。それらが、抑制こそ生産である、という命題の不思議な意味である。抑制は欲望と齟齬するわけではなく、潜勢性は非現実性を意味しない。系統発生の線に個体発生の線を交錯させ、その流れの底深くにあえて特異性を埋もれさせる有性生殖の戦略には、たとえばジャック・デリダがいうような、ある種の快楽主義を想起させる「散種」（いわゆるポストモダニズムの典型といえる）とはまったく異なる、生命の複雑な進化の歩みをみてとることができる。

著者の議論をわたしなりに、詩的に敷衍していくなら、進化の概念を、環境という変数をかならずしも必要としない、自己自身の創造的な能力に変えようとしているかにみえる。しかし、わたしはいささか先走りすぎたかもしれない。著者はもち

ろん、進化の関数に性という変数を加えることによって、進化の新たな可能性を提示したのであり、その点、あくまで純粋な科学者である。また、著者は一度も種の個体化という言葉を意識的には使っていない。著作全体の配分でみれば、一連の流れのなかで何気なく漏らされた、あまりに些細な呟きに、わたしは注目しすぎているのかもしれない。だとしても、こうした思わず漏れた述懐に、人文学者のわたしは、著者の生物学者として過ごした歳月の重みを感じる。どうしても、そのような歴史的で存在論的な概念の予兆を読み取ってしまう。じじつ、たんなるスローガンにはとどまらない、科学的に真新しい機能をともなう進化のありうることを、この著作は十二分に示唆していると思う。もっとも純粋な人文学的な意味での進化（渦をなして広がる……）、あるいは19世紀のひとたちがその言葉に託した革命的な意味への回帰にすら、みえてしまう。環境に依存しない、人間自身の変革可能性としての、すなわち生の本質にある、進化の概念……。

二、新しい社会進化論

さて、著者の視座を別の形で敷衍して、もう一度「暴走」してみよう。原核生物が寿命をもたない暴走系である、という著者の卓見を目にしたとき、すぐに浮かんだ書物がある。エルンスト・カントロヴィッチの『王の二つの身体』（小林公訳、ちくま学芸文庫、2003年）である。不死たるべき中世の王たちが、にもかかわらず、民衆と同じ死すべき身体をもつということを、どう解決したか、という主題をもつ書物である。

そこでは、近代国民国家に至る歴史は、中世の王をめぐるひとびとの議論にこそ求められる。たしかに、民衆より優れた存在である王は、王国の永遠の正統性を保証する。そして王の優秀性は、当の王国の存続によって、回帰的に証明される。だが、その王が民衆と同じように死ぬとしたらどうか。それは王国の正統性を揺るがせることである。この不可避の危機――生物学的限界を乗り越えるため、キリスト教や

古代ローマ法学の力を借りながら、王の身体は二重化される。王は死すべき生物学的身体（自然的身体）と抽象的な人文的身体（政治的身体）とをもち、永遠に生きる団体とみなされるようになった。この二つの身体性こそ、代表制民主主義にもとづく想像的かつ抽象的な、近代の国民国家を実現した、というのである。国家の不死性を主張しようとする、厳格な保守主義者であるカントロヴィッチにとって、近代国民国家の成り立ちは中世の政治神学を通過することで証明されねばならない問題だったのであるし、また近代国民国家に隠された保守性を指摘する際に、彼の意図に反して、国家の永続性なるものは想像的で抽象的なものにすぎない、という形で、近年の国民国家論によって幾度となく批判的に援用されることになった。

だが、不死である原核細胞と、死すべき真核細胞の、決定的な階層性（団まりな）を、民衆と王とに当てはめることが許されるなら、議論はまったく逆になる。王も民衆も、いずれも社会的な概念だが、その点に注意していえば、民衆こそ、バクテリアのように死ぬことのできない存在だからである。カントロヴィッチの視座は、王には生物学および社会的な視点を加え、民衆には生物学的視点だけを加えるから、先述のように差異化されてしまうだけのことである。だが民衆は、どこまでも、自分の遺伝子をコピーするだけで、けっして死ぬことがない。幾度、個体が生物学的な死を迎えても、大洪水のような災害のないかぎり、社会的には永久に存在しつづける。王朝の交代とともに古い民衆が息絶えたという話は、いまのところ聞いたことがない。もちろん、混交があり、分散があり、さらには「水平遺伝」のごとき合成がありうるから、見かけ上の消滅はいくらでもある。だがにもかかわらず、民衆はかならずなんらかの形で存在しているだろう。つまり民衆は、《子供》のように、前－個体（主体）的で、非－自己同一的で、無－人称的で、そして無性の存在である。わたしの責任で著者の言葉を借りれば、暴走系である。

王はちがう。彼／彼女はおのれを「我」と呼び、他者を「汝」と呼ぶ。個体（主体）的で、人称的で、自己同一的で、そして有性である。つまり彼／彼女だけが死を迎え、そして世代交代を遂げる。すなわち、歴史をもつ。社会的にいって、死が王にだけ可能であることは、歴史が証明している。中国やヨーロッパの王朝、天皇と幕府とのあいだの盛衰をみれば容易に理解できる。繰り返された君主の死にかかわらず、

民衆はついに死ぬことがなかった。彼らは現れたり消えたりするかわりに、変容する。

考えてみれば、王のおこなう有性生殖は、遺伝的多様化を目して実践されるのではまったくない。著者の議論を傍証するにはあまりに時間軸の質がちがいすぎるとしても、われわれに知られているもっとも古い王朝であるエジプトがそうであるように、むしろ初期の王朝は、原始的な有性生殖である同系交配やオートガミーのごとく、近親相姦を推奨しているし、ギリシア神話や大和神話、あるいは宮古島神話のような東南アジアの神話に至るまで、この世のはじまりには決まって、水蛭子神話（＝突然変異の有用性の検証）がある。ある国家の正統性を担保しているのは、王の不死性ではなく、むしろ世代交代の蓄積（王の死の反復）である。だからこそ、王の死は秘匿されるよりも盛大な祭典となって白日の下に晒され、誰の目にもあきらかな巨大な墳墓が繰り返し形成された。死は誇示されている。カントロヴィッチの政治神学よりも、著者から敷衍した生物学的視座のほうが、はるかに正しくわたしには映る。

この観点をもし貫けるなら、近代化の道筋についての歴史家の考察は、まったく異なったものとなる。革命とは、王を民衆と同じ死すべき存在として玉座から引きずり降ろすことではない。民衆がおのれの死を発見することである。王の不死性は想像的なものにすぎず、したがって国民国家の恒常性も同様に想像的なものにすぎないという批判は、ほとんど意味をなさない。反対に、民衆ひとりひとりによる、おのれの死の発見こそ、王と同様の個体化＝主体化を実現し、国民国家を可能にする必須の条件となる。だから、国民国家は、けっして想像的なものでなく、死という現実的な基礎を有している。想像的というより、死が生と比較して見えにくいだけのことである。言い換えるなら、個体としての民衆――名前のある民衆という矛盾した存在――が死ぬたびごとに、その不在は国民国家をすこしずつ形成し、また補強してもいる。

とすれば、時代の変革期にいつも存在した特別な死の説明がつく。おのれに固有の名を名乗りつつ（個体化を遂げつつ）、「祖国のために」ではなく、おのれ自身のために自ら縊（くび）れていった、中世の武士や騎士たちの存在こそ、世代交代と民衆の歴史とを可能にし、近代の幕開けを準備したのではないか……。平家物語や太平記に

みられる武士や女たちの大量の自殺、ルネサンス期におけるペストの死、あるいは「大東亜戦争」における特攻がなにを意味しているかについて、われわれはもっと別種の理解を必要としているのかもしれない。それらいくつかの死は、けっして国民国家を弱体化させなかった。むしろそれに向けて時代を推し進めた。時代変化のまっただなかにあって、彼らはあきらかに、死を誇示していた。

実際、王位を廃したフランスと、王位を残したイギリスとで、近代化の点で問題的な差が存在しているわけではない。また王のほうがよほど革新的で、民衆のほうが保守的であることも往々にして起こる。そのことは、王を打倒して民衆と同じ存在にすることと革命とがじつは無関係であること、むしろ民衆の王化＝個体化こそ重要であることを示唆するように思われる。

だが、実際の近代がそのようなものであったかと問われれば、首肯しがたい面があるのはたしかである。せっかく露にされた死は、瞬く間に覆い隠され、死は老いとともに、生からますます遠ざけられる。個体化よりも、個体＝主体が重視され、世代交代よりも個体＝主体の維持が重視される。名を遂げるよりも「所有」され、それを匿すことに躍起になる。欲望は解放の要求と重なりあい、ストア的抑制とは無縁のものとされる。国民国家とは、死がもたらすものだとしても、個体化より、世代交代を厭う永続的な個体＝主体の重視される集団的状態の呼称というべきだろうか。有名になるにせよ、ふたたび死とともに無名になるにせよ、せっかく遂げられたはずの名は、所有され（＝固有名）、匿名性のなかに溶解してしまうのだ。

じじつ、現実をみると、核燃料サイクルのごとき永久機関を夢見る近代のテクノロジーは、世代交代を促すよりも、人称的で自己同一的な個体を永続させることのほうに、力を費やしてきたように思われる。個体化よりも個体が重視される（というより概念的に区別しない）点は、生物学も、社会学もかわりはない。この点において近代を特徴づけることのほうが、実態には合っているだろう。

しかしわたしは、そうした別種の近代、いまだ胚のままで留まっているような、そんな潜勢的な生のありうることを、確信してもいる。「文化」や「時代」の革新、それは過去に隠された言葉の秘密を読み解くことからはじまる。地層の底深く、誰も見向きもしなくなった——その意味では、同時代の「文化」や「時代」にあては

める解釈さえ不可能になった、そんな古めかしい言葉を取り出してはほくそ笑んでいる、一風変わった古文書学者（アーキヴィスト）は、いつも真新しい、創造的な読解可能性を、おのれ自身のために、もたらすことができるものである。

ともあれ、生と死と、二つの考えが交錯していて、世界は混乱したままである。神の死だけでは足りないといったニーチェの苦悩が、思い起こされる。ニーチェはむしろこういっているかのようだ。「神は死んだ。だが、人間は死ねるのか？　今度はお前たちの番なのではないか？」 近代の本質にある渾沌からどのような概念を引き出すか、それはわれわれ人文学者の課題である。そのとき、著者の仕事は心強い味方でありうる。

おわりに　ストア的進化論

著者はいう。

> 老化・死が進化的な必然として獲得されたものなら、それはヒトが進化史で獲得した「能力」と見るべきではなかろうか。ヒトは「老化し死ぬ能力」を手にした生物と言うべきだろう。（p.194）

著者の見方から想起されるのは、古代ギリシアの哲学者、のちのストア哲学に多大な影響を与えた犬のディオゲネスのエピソードである。

> 「君はもう年寄りだ。今後は力を抜いてくつろぎたまえ」と言った人たちに対して、「長距離コースを走っているのに、ゴール間近で力を抜くべきだというのかね」と彼は言い返した。（ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（中）』加来彰俊訳、岩波文庫）

死や老いは、けっして生の否定ではなかった。むしろますます速度を増して火花を散らしながら、生の証としてのバトンを、来たるべき生に渡す。有性生殖への変化が、著者のいうとおり、遺伝子の多様化よりも突然変異の検証装置なのだとすれば、重要なことは、個体よりも個体化であり、個体の維持よりも人称的な世界から無－人称的な世界へ、有名の個体的な世界から名も無き前－個体的な世界――「ナイルの一滴」――への回帰、すなわち世代交代のはずである。近代民主政治が死や老いを遠ざけてまで必要とした個体＝主体とは、もっと長い死生の反復の一部分を固定したものにすぎない。当時のアテナイは、すでにマケドニアに従属し、民主政治は疾うに破綻している。そうした社会に彗星の如くあらわれた犬のディオゲネスの哲学と、著者の言葉が見事に重なりあう。後期に入りつつあると思われる近代民主制社会のなかで、著者の議論は人文学者といえど、無視できない響きをもつことは確実である。ここまで、自由に披瀝した誤読の責任はもちろんわたしにあるが、そうした誤読可能性もふくめて、おそらく、21 世紀の学知は、惑星のように、著者の進化論をめぐることになろう。事故から出来事へ――この新しい進化論は、21 世紀における、ひとつの恒星なのである。

■ Bibliographical Information
著者：高木由臣
単行本：240 頁
出版社：NHK ブックス
ISBN-10：414091212X
ISBN-13：978-4140912126
発売日：2014/1/21